

人間形成の剣と禅

丸川 春潭

1 はじめに 剣禅一味（剣禅一如）の達人とその言葉

古来の伝記を繙ひもといてみるまでもなく、剣道において達人の人といわれている人物で、禅にも縁を持たれ禅の修行をされた方は非常に多い様に思われます。

近くは小川刀耕先生、妙峰庵佐瀬孤唱老師、寶鏡庵長野善光老師、また少し遡さかのぼって山岡鉄舟居士、勝海舟居士、鈴木正三大和尚などなど枚挙にいとまがないほどであります。

今回の撰心会は、昨秋（平成17年）ご逝去されました寶鏡庵長野善光老師の遺のこされた言葉を紹介しておきます。

寶鏡庵老師いわ云く、

「禅は布団上に己を殺すことが主眼であり、剣は己を捨てる即ち捨身が原点である。表現は異なるが云わんとする処は同じである。」

「剣・禅ともにその正しい道は、己を殺すことによって転迷開悟することが出発点であって、一生悟後の修行を継続して、人間形成という高い目標に向かって精進するものであることを知らなければならぬ。」

また、剣道の方々と人間禅の関係者との共通の大先輩である小川忠太郎先生（無得庵小川刀耕老居士）が、剣と禅について遺された言葉も併せて紹介しておきます。

小川先生云く、

「私のいう剣道は、剣の道であり、この道の修行目標は生死をあきらめることである。」

「剣を通して人間形成をする。これが剣道の目的である。」

「剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である。」(全剣連「剣道の理念」)

(「人間形成」という言葉は、「人間形成のための禅」を標榜^{ぼう}する人間禅道場で長年禅の修行をされた小川先生が、剣道理念に特に付け加えられた言葉であり、現在も全日本剣道連盟の「剣道の理念」に「人間形成の道である」と入っているのは、小川先生の言葉から取られたものであります。)

以上の寶鏡庵老師、小川先生に共通する^{まと}的は、一点「命を捨てる」というところにあります。

2 「命を捨てる」ということは

剣も禅も同じように人間形成がその目的であるとし、そしてその人間形成のためになすべきことは、「命を捨てる」ということであると二人の大先輩が申されています。

「命を捨てる」ということは、どういうことでしょうか？

そして、命を捨てるということが何故人間形成^{つな}に繋がるのでありましょうか？ このことについて少しお話ししましょう。

まず、「命を捨てる」ということですが、これは、生物としての機能が停止し無機物になるという生物的死とは異なり、生物として人間として生きたまま「命を捨てる」ということであります。これは、寶鏡庵老師のお言葉にある「布団上で死ぬ」ということであります。

この生きたまま「死ぬ」ということは、意識の中で「我を殺す」ということであります。すなわち数息観法であれば、数息観に成り切って数息観以外の念慮は全く出てこない「一念不生^{ふしろう}」のところまで行った数息三昧の極地に浸りきることであります。(耕雲庵老大師の『数

息観のすすめ』でいえば、第三期の数息観（息を数えない数息観法）の状態であります。）

「我」というものは、相対的なものであります。「我」が意識的にしろ無意識的にしろ少しでも残っておれば、絶対の境地に入ることはできません。絶対の境地に入ることは、釈迦牟尼世尊の悟りの前提であります。絶対の境地に入ることなくして悟りは絶対に得られません。まさに「大死一番、絶後に再蘇」であります。

「我」というものは相対的なものの代表であり、これを殺し尽くせば絶対の境地に入ることができ、宗教の根幹に触れることができるということであります。

科学と宗教の違いは、相対的思考と絶対的無の世界の違いであり、相対的か絶対的かであります。相対的の代表が「我」であり「生死」であります。宗教的な領域での見方・尺度、剣道・剣の道というような「道」と名の付くもの、禅による人間形成・剣道による人間形成などは全て、相対を超えた絶対の世界に入り込まなければ本物にはなりません。

日常生活・社会生活では、ほとんどが相対的尺度で考え動いておりますが、ではその相対の世界から絶対の世界に入り込む道・方途はどうすればよいのか？ということが当然の疑問として出てくると思います。これに対する答えは、全ての宗教において用意されています。すなわちその架け橋は、先人の知恵によって工夫され遣されているのであります。全ての宗教それぞれ独自の方法を持っていますが、その共通する本質は「三昧^{ざんまい}」であります。架け橋は「三昧」なのであります。何等かの方法（キリスト教の祈り、イスラム教の礼拝、浄土真宗の念仏、禅宗の坐禅）によって「三昧」になるということが、その架け橋を渡るということになります。数息観法もその一つであります。

この相対から絶対の世界に入らないと本物にならないというのは、宗教だけではなく、一流の技芸道は全てそうであります。もちろん剣

道においても然^{しか}りであります。剣道での代表的な三昧の行、すなわち「我」を殺し尽くす方法としてあげられるのが、一刀流では「切り落とす」とあり、山岡鉄舟先生の「立ち切り」であります。

勝海舟が師の島田虎之助のところで死にものぐるいの修行をし、実際に稽古^{けいこ}の最中に打ち負かされて気絶をしてしまった。そして息を吹き返したときの最初の一言が「私の死に様は如何^{いかが}でございましたか？」という言葉であり、それを聞いた島田虎之助は勝海舟に免許皆伝を許したということであります。「我」というものが切り落とされ、文字通り「絶後に再蘇」したのを見て取ったのであります。

「命を捨てる」ということは、坐禅での「布団上で死に切る」でも、剣道稽古での「切り落とす」でも同じことであり、一念不生の透徹した三昧に入り込むということであります。そこでは「我」というものは消えております。生死はなく「不生不滅」の境であります。本物の剣道を目指し、剣の道で人間形成をしようとするのであれば、「命を捨てる」剣道稽古でなければ、「生死をあきらめる」剣道にはなりません。

仏教を志す学人であれば、「命を捨てる」修行をしなければ本当の修行にはならない、と鈴木正三和尚は申されておられますが、まことにその通りであります。「人間形成のための禅」といっても、最初から最後まで「命を捨てる」ことを離れてはあり得ないものです。言い換えると本当の「三昧」に入り込むことなくして人間形成はあり得ないのであります。

次に、一般的に本当の人間形成を目指す禅の道は、どういう教育システムになっているのかということについてお話しします。

3 禅による人間形成

(1) 道力と道眼

禅による人間形成は、道力を養うことと、道眼を磨くことの二本立

てとしてとらえられます。

道力の養成は、坐禅における数息観法が中心になる。数息観により定力（集中力）を付けていくことが道力養成の中心になるが、この坐禅における数息観の実践を「静中の工夫」といい、これに対して、「動中の工夫」としてゆっくり歩行しながら「念念正念歩々如是」と念じて定力（集中力）を養う「経行」という方法も古来より伝わっている。また、草取り、掃除、肥汲み、食事作りの作務の行は、まさに動中の工夫そのものである。

この道力の養成で肝要なことは、知ることではなく実践して身につけることであるから、生活の中で常時数息観法を実践し、それを継続するということが大切である。古来一日一炷香いっぢゆうこうとって、毎日線香1本（約45分間）の数息観法の実践が人間形成のために極めて大切であると喧しく言われている。

道眼を磨くということは、数息観を幾ら永年やってもできるものではなく、これにはやはり、正しょう脈みやくの師家しけに参じ、公案の工夫によって、見性するということが不可欠である。その見性のための工夫の仕方についての基本は、道力を磨くときと同じように三昧になって、公案の工夫三昧に徹することである。公案と一体になることによるのみ見性に迫ることができるのである。これは、初則のみならず「即今汝性にょしょう」「五蘊皆空ごん」「疎山寿塔とつ」「洞山五位」等々200則の公案全て同じである。

またこれは、公案の工夫だけでなく道力を磨くことにおいても、共通して言えることで、「一念不生の三昧境」に人人が脚实地に到らなければ、道眼・道力の進展にならないのである。まさに公案の工夫三昧が「布団上で死に切る」ということになっているのであります。

（2）公案と人間形成

入門が許されますと、師家から参究する課題としての公案が授けら

れます。

公案は全て、仏祖方がその鍛錬し上げた通身是道^{これ} 全身是法という如是法三昧の境涯から、ゴロゴロッと吐き出された一言半句 一機一境の悟りの端的である。この「さとり」の端的は、初関の公案から200則の最後の公案まで全て同じである。

公案をいただき参禅することによる人間形成とは、公案の工夫三昧の行を通じて、自らの境涯をその公案の境涯にまで高めるといふところに眼目がある。

「禅による人間形成」とは、公案に三昧になることにより仏祖に参じ、自らの境涯を、古則の中に塗り込められている仏祖方の境涯にまで高めていく修行のことである。一則一則別解脱で、一つ一つの公案に成り切り工夫三昧になることにより、その公案の宗旨を徹見することができ、道眼が開かれ、一步一步境涯を高めてゆくことができる。これが禅による人間形成の道である。

骨折りが大切であるとよく言われるが、小さい殻の中に閉じこもっている境涯を、公案を目標にして打破して、より大きなより高い境涯へと人間形成してゆくときに、骨折りということは避けて通れないものである。一念不生の所に入り込むことができなければ、公案の中に塗り込められている境涯というものが見えないのである。公案三昧になって「死に切る」と、その公案の境涯に近づけ、道眼を開くことができるのである。

骨折りとは、公案の工夫（公案に成り切る、公案と一体になるための努力）三昧に徹し、一念不生の所に入り込むための努力である。難関の公案（人それぞれで難関さは異なるものの）にぶち当たれば、その時こそ飛躍のチャンスであり、骨折りを避けず、真正面からがっぴりと難関の公案に取り組んで真剣に骨折ること。骨折りが大きければ大きいほど力をつくものである。そして苦労して突破した時は、飛躍が大きいのである。

人間形成とは、この骨折りによって構築されるものである。骨折りを惜しんでは、人間形成は進展しない。

(3) 臨濟禅における人間形成の階梯

臨濟禅における人間形成を見ると、道力・道眼という二本の柱以外に、極めて特徴的な人間形成のための教育システムが存在することに留意する必要がある。

見性するということは、釈迦牟尼世尊のみならず、世界宗教の創始者が等しくつかんだ宗教的根源の絶対性を徹見するというのである。すごいことであり、素晴らしいことである。

しかしこれだけでは、宗教的救済においても、人間形成においても不完全、不十分なのである。すなわち見性の眼を開いた後に、悟後の修行が不可欠なのである。見性入理は、平等と差別のうち、平等の切り口をしっかりとつかむということではあるが、真理の把握からみると偏った見方ということになる。見性入理の段階のままを一枚悟りといまったい、全き人間形成から見れば、大きな欠陥を持ったままの段階であるということになる。

悟後の修行・人間形成の階梯は、祖師方ていの研鑽と工夫によって確立しており、その道が明確に残されていることが、禅による人間形成の特徴であり、あらゆる世界宗教の中でも冠絶しているといわれる由縁である。

これは禅宗の中でも臨濟宗の特徴であるが、我が教団は臨濟宗の円覚寺法系を正しい印可の系譜として伝承しているので、当然その悟後の修行の階梯のシステムをしっかりと継承している。しかも、更に耕雲庵老大師の卓抜した道眼と見識により、従来さんの伝統の上に更に一步発展させている所があるのである。

それは、従来公にされていなかった公案の中から、主要なもの200則を選んだということ、そしてそれを公にしたことは画期的なこと

ある。しかも、その200則を禅による人間形成の階梯に従って、低きから高きに行けるように適格に並べて公にしたことは、禅宗のみならず、仏教のみならず、全ての宗教において歴史的な人類の精神文化の進歩を画したものである。

正しい志（^{ほつぼだいしん}発菩提心）と努力があれば、限られた特別の才能を持っている人だけということではなく、正師の元でこの人間形成の階梯に従って進めば、誰でもが法の淵源を極められるのである。これが臨済禅教育システムの他では見られない卓抜したところであります。

この禅による人間形成の階梯の中身は、最初の段階で「父母未生以前の自分」あるいは「片手の声」という時間空間を越えた絶対の切り口を発見（見性）させる。これはお釈迦様の悟りである「天地と我と同根、万物と我と一体」「山川草木悉皆成仏^{しっかい}」を、お釈迦様と同じように徹見することで、最初の階梯を登ることになる。

そして次に、この悟りの後の修行（悟後の修行）に200則の大部分が用意されている。この悟後の修行の位置づけは、最初の階梯の悟りの臭みを抜いてゆく修行であるということが出来るし、また最初の階梯での絶対の切り口の発見（平等の切り口）に加えて、差別の妙所をあきらめる修行でもある。

耕雲庵老大師の師匠であった鎌倉円覚寺の前円覚 両忘庵釈宗活老師の「両忘庵」という庵号は、「迷悟両忘」という言葉から取られたものである。この意味する所は、迷を見性することによって本質的に乗り越えることを人間形成の必要条件とし、その悟りも忘れてしまうということ人間形成の十分条件とするというものである。

臨済禅の人間教育システムはこれから先もまだまだ深く高く構築されていますが、本日はここらあたりまでにしておき、この後の話は後日にいたします。

4 おわりに 人間形成の剣と禅

禅では、道眼と道力ということをも人間形成の両輪として位置づけていることを先程もお話ししましたが、剣道の稽古を徹底すれば、道力はしっかり付くと思いますが、剣道の稽古だけで道眼を開き磨くということは、数息観の修練だけで道眼を開き磨くと同じように不可能ではないが極めて難しいと思います。剣道の稽古でしっかり道力を磨き、参禅弁道によって道眼を開くということになれば、道眼・道力を兼ね備えた本当の人間形成になるように思います。その好例として小川刀耕先生や寶鏡庵老師を見よということになります。

山岡鉄舟居士や小川刀耕先生、寶鏡庵老師にとって、まさに悟後の修行、人間形成の仕上げになった極めつけの公案があります。それは人間禅の瓦釜集の190番目の公案である「洞山五位」の中の兼中至：【両刃鋒ほこさきを交えて避もくことを須もちいず、好手こうしゅかえ選かって火裏かりの蓮れんに同じ。宛然えん自おのずずから冲天おのずの気あり】であります。この則も、人類の掛け替えない法財であります。本格の剣道を志す方々は、この法財と真正面から向き合い、これを嚙み破って、剣の道を究めていただきたいと思ひます。もちろんこれは剣道のみならず、茶道・書道・弓道などでも大いに利用して、それぞれの道の淵源を極められるというものであります。

禅における「命を捨てる」修行は「絶対の信をおける師に対して、己を空しくして参ずる」ということが大前提であります。そして師家は、人情を涓滴けんてきも施ほつせんじょうりさない法戦場裏ほつせんじょうりにおいて、まさに「我」を抜き取る難透難解げの公案を学人にぶつけて白汗びゃっかんを流させる修行を20年、30年させて人物を叩き上げるのであります。本物の人物を作るためには避けられないプロセスであります。

歴代の師家から耳にたこができる位に言われていることは、「禅学になるな！」ということでもあります。そのためには、鈴木正三和尚や小川刀耕先生、寶鏡庵老師の言われる通りで、「命を懸け、死に切る」参禅弁道を徹底しなければなりません。そしてまた、そうならないと

絶対に透さない、許さないのが正師の役割であります。

また人間禅では、作務をしっかりやらない参禅だけの公案学の修行では、本物の人物はできないということになっております。作務とは、坐禅の静中の工夫に対する動中の工夫を指しております。また先程述べました道眼と道力の後者を、しっかり作務をやることによって身に付けることであります。道力が付かないと生き生きとした禅機が出てこないものです。禅の修行者は臥薪嘗胆^{がしんしょうたん}して、剣道の「切り落とし」「立ち切り」の行を常に憶念すべきであると考えます。

この後に、小川刀耕先生の流れを汲み、寶鏡庵老師とも機縁のありました浜松の直心堂の両先生が直心影流法定の形をご披露いただけることになっていますが、極めて優れた動中の工夫の方法であると思います。大いに参考にさせていただきたいと思えます。

また、最後に数息観を体験いただくことにしておりますが、数息観は仏教が誕生する以前からの東洋的観法、すなわちところを磨く方法として数十世紀にわたり伝承されたものであり、宗派性の全くないすなわち学校教育においても採用可能なものです。ぜひやり方を覚えて家庭や職場でおやりいただきたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。

(平成18年3月25日、第68回東海支部摂心会の法話より)

著者プロフィール



^{しゆんたん}
丸川春潭（本名 / 雄浄）

昭和15年生まれ。大阪大学理学部卒業。住友金属工業技監、日本鉄鋼協会理事を歴任。元大阪大学特任教授。現在、中国東北大学名誉教授。工学博士。昭和34年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅教団総裁・師家。
庵号 / 葆光庵^{ほうこう}。